

志賀直哉年譜考（一）

——明治十五年まで——

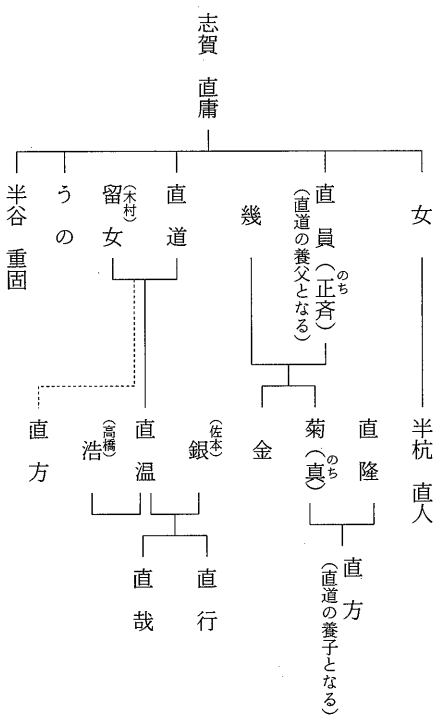
生 井 知 子

今回より、「志賀直哉年譜考」と題して、志賀直哉およびその周辺をめぐる年譜を作成し、順次発表することとした。

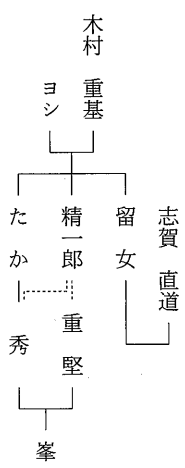
従来の年譜では、根拠が明記されていない場合が多く、それが真実であるかどうか確認するのが難しかったが、本稿では、出来る限り詳細かつ根拠を示した年譜の作成を目指している。

もとより、先学の調査研究によるところが大きく、いまだ完璧なものからは遙かに遠いが、少しでも実証的な資料を積み上げて行ければと考えている。本稿は、今後とも新しい資料の出現によって訂正され続けるべきものであり、お読み下さった皆様から、様々な情報をお寄せ頂きたいと冀う次第である。

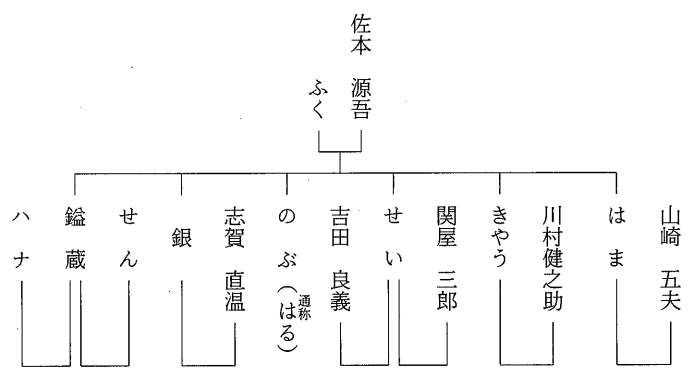
志賀家略系図



木村家略系図



佐本家略系図



文政二年（一八一九）己卯

2・12 外祖父・佐本源吾が生まれる。（川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』）

文政十年（一八二七）丁亥

11・14 祖父・志賀直道が生まれる。（新『志賀直哉全集』⑩日記人名注）

文政十三年・天保元年（一八三〇）庚寅

2・8 外祖母・柳瀬（佐本）ふくが生まれる。（川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』）

ふくは、大阪の薩摩の蔵屋敷で生まれ、若い頃から江戸に出た。（『実母の手紙』）

天保五年（一八三四）甲午

9・? 志賀直道の長兄・志賀直員が、小姓として江戸詰中に弓道修行の目的で出奔。（志賀家系図）（『祖父』二、十四）

* 『祖父』（一）によると直員は直道より五歳年上だが、存疑。『祖父』（十四）には直員が明治二十四年に七十七歳で死去との記述もあるので、十二歳年上か。

直員は、天保七年十二月三日に帰参、十一日に改易となるが、天保八年八月に弓道上達の旨が上聞に達し、十二月二十六日に御構御免となる。（志賀家系図）

天保七年（一八三六）丙申

7・8 祖母・木村（志賀）留女が生まれる。（志賀家系図）

天保九年(一八三八) 戊戌

6・21 曾祖父・志賀直庸が死去。行年四十九歳。(志賀家系図)

8・12 志賀直道が家督相続をして、家職を継ぐ。(志賀家系図)

* 『祖父』(二)によると、直道は、亡父の家職である物頭、普請奉行を継いだとあるが、存疑。家禄は二百石。

* この時点で、志賀直員は直道の養父となったか？

9・? 当主・志賀直道が若年のため、志賀直員も奉公するよう命じられる。(志賀家系図)

天保十一年(一八四〇) 庚子

この年 佐本源吾が亀山藩士として召し出され、江戸下屋敷詰となる。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

嘉永四年(一八五二) 辛亥

9・1 志賀直員が物頭となる。(志賀家系図)

嘉永五年(一八五三) 壬子

8・5 相馬誠胤が生まれる。(平成新修旧華族家系大成)

この年 志賀直道は、仕法掛見習、代官次席を命じられる。(志賀家系図) 『祖父』(二)

相馬中村藩と二宮尊徳との関わりは、相馬藩の富田高慶が天保十年九月に入門したのに始まる。疲弊した藩を救う

ため藩主や家老らが二宮尊徳に懇願し、弘化二年十二月一日から富田高慶の手によって相馬藩の報徳仕法が着手さ

れた。(新妻三男『二宮尊徳翁と警城中村藩』)

嘉永六年（一八五三）癸丑

2・14 伯母・佐本（山崎）はまが生まれる。（川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文学』）

父・志賀直温（幼名・春次郎、『祖父』十三）（読み・なおはる、通称・ちよくおん、阿川弘之『志賀直哉』）が生まれる。
（新『志賀直哉全集』⑩日記人名注）*志賀家系図では十二月十四日生まれとするが、存疑。

嘉永七年・安政元年（一八五四）甲寅

1・? 志賀直道は、自ら志願して二宮尊徳に隨身し、仕法修行の命を受け、一人今市に赴く。（志賀家系図）〔祖父〕二

直哉の子供の頃、志賀家には『報徳記』、写本『報徳経』、尊徳の肖像画、着物、羽織があった。（『祖父』六）

8・28 伯母・佐本（川村）きやうが生まれる。（川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文学』）

この年 志賀直員は、本多越中守藩士・星野覚兵衛に入門し、西洋流炮術を学ぶ。（志賀家系図）〔祖父〕十四

安政二年（一八五五）乙卯

4・? 志賀直員は西洋流炮術皆伝を済ませる。（志賀家系図）〔祖父〕十四

安政三年（一八五六）丙辰

3・15 志賀直道は、仕法掛、代官助役席を命じられる。（志賀家系図）

6・? 志賀直員は病気のため帰国し、七月六日に隠居。隠名・正斉。（志賀家系図）

9・9 志賀直道は仕法掛、中頭次席を命じられる。（志賀家系図）

この年 二宮尊徳が死去（十月二十日、『国史大辞典』）し、志賀直道は中村に戻る。（『祖父』二）

安政五年(一八五八) 戊午

2・? 荒地整備の件で二宮弥太郎を手伝うよう幕府から達しがあり、下旬、志賀直道は妻子と共に今市に赴任する。(志賀

家系図)〔祖父〕二)

教育の都合から志賀直温は途中で中村に返され、志賀正斉夫妻に育てられる。そのため一人っ子にしては父母との関係が冷たくなる。〔祖父〕十四)

3・? 志賀正斉は関流西洋流砲術引受銃隊掛を命じられる。(志賀家系図)

安政六年(一八五九) 己未

1・9 伯母・佐本(関屋・吉田) せいが生まれる。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

安政七年・万延元年(一八六〇) 庚申

この年 佐本源吾は大小姓となる。家禄六十石。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

万延二年・文久元年(一八六一) 辛酉

5・9 伯母・佐本のお(通称・はる、新『志賀直哉全集』⑩日記人名注) が生まれる。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

のおは嫁いで男の子を生むが耳が遠いので不縁となり、佐本家に戻る。佐本鑑蔵の死後は、甥のもとを転々とする。

(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

12・13 志賀直道は、中頭上席を命じられる。(志賀家系図)

文久三年（一八六三）癸亥

3・8 志賀正齊は兵員方、御台所頭次席、兵具奉行となる。（志賀家系図）

9・15 母・佐本（志賀）銀が生まれる。（川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』）

『母の死と新しい母』（四）によれば、生まれたのは下谷の御成道（亀山藩主・石川家の上屋敷があった、阿川弘之『志賀直哉』だった。

文久四年・元治元年（一八六四）甲子

8・3 志賀直道は、武田耕雲斎率いる天狗党一味の相馬藩士・佐々木重威と筑波山に話をしに行き、根付を貰う。（祖父）

八、九、二十五）↓『暗夜行路』（第三一八）のモデル

元治二年・慶応元年（一八六五）乙丑

4・24 相馬充胤が隠居し、相馬誠胤が相馬中村藩主となる。（『平成新修旧華族家系大成』）

慶応二年（一八六六）丙寅

5・27 叔父・佐本鑑蔵が生まれる。（川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』）

この年か？／前年か？

志賀直道は相馬に戻る。（『祖父』十一）

相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・「はじめに」によれば、慶応元年の調べで、直道は「御仕法掛り、日光今市詰め、十四年勤勞」とある。

慶応三年(一八六七)丁卯

12・25 志賀直道は、御使番次席を命じられる。(志賀家系図)『祖父』二(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・「はじめ

に」)

慶応四年・明治元年(一八六八)戊辰

4・13 志賀直道は、郡代を命じられる。(志賀家系図)『祖父』二(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・「はじめに」)

閏4・29 志賀直道は、兵糧方司役に命じられ、棚倉に出張する。(志賀家系図)『祖父』二(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書

簡』上・「はじめに」)

この頃か? 官軍が攻め寄せ、戦局が迫ったため、志賀留女は中風にかかっていた志賀直道の母を若克に背負わせ、女中の里に

逃げる。数え十六歳の志賀直温は、総領組として戦に出る。留女は直温が卑怯な行いなどを決してしてくれないようにと願う。直温の同い年の従弟・半杭直人も戦に出る。『祖父』十三)

志賀正齊は原釜の大砲方指揮を命じられる。(志賀家系図)『祖父』十四)

6・22 佐本一家は、藩主の命により、江戸を出立。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』) *桜井勝美『志賀直哉の原像』に

は、六月十二日・六月二十三日との記述あり。

7・12 佐本一家は亀山に着き、江ヶ室の家に入る。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』) *桜井勝美『志賀直哉の原像』に

は、七月十日・七月二十二日との記述あり。

8・6 相馬中村藩、官軍に降服。(新妻三男『宮尊徳翁と磐城中村藩』)

8・15 志賀直道は、若年寄を命じられる。(志賀家系図) *相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・「はじめに」で

は八月十三日、『祖父』二(一)では八月十四日とする。

この年か？（明治初年）

相馬藩の産米を古河市兵衛が主宰する小野組糸店が取り扱い、古河市兵衛と志賀直道が知り合う。（五日会『古河市兵衛翁伝』）

明治二年（一八六九）己巳

1・11 志賀直道は、中老を命じられる。権知事として伊達郡桑折陣屋へ出張。（志賀家系図）（『祖父』二）（相馬郷土研究会資料

叢書『志賀直道書簡』上・「はじめに」）

8・12 志賀直道は、福島県大参事を命じられる。（志賀家系図）（『祖父』二）

明治三年（一八七〇）庚午

この年か？ 伯母・佐本はま、山崎五夫と結婚。（川村渡『伊勢亀山・志賀直道の文学』）

明治四年（一八七一）辛未

2・？ 志賀直温、静岡の山岡鉄舟のもとへ遊学。（阿川弘之『志賀直哉』掲載の直温自筆履歴書）

8・？ 志賀直温、東京に戻り、本所相生町の共立学舎で英書修学。その後も芝の日新義塾や湯島の共慣義塾など学校を転々とする。（阿川弘之『志賀直哉』掲載の直温自筆履歴書）

11・3 相馬誠胤が慶應義塾に入る。保証人は木村精一郎。（慶應義塾「入社帳」）

11・？ 相馬家は、先代の御遺金と非常御備金の古金銀二万両を通貨に代えた約八万円を小野組に預け、利子の配当を受けらる事とする。その後の預金も合わせ、元利合計九万四千余円の預金となる。（相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』）

上・「はじめに」/M9・11・29書簡)

五日会『古河市兵衛翁伝』によれば、明治五年、相馬家が財産の利殖保全のため、古金銀三万両を小野組に信託し、糸店が管理することになり、志賀直道は古河市兵衛への信託を深めたという。

明治五年(一八七二) 壬申

2・1 壬申戸籍によると、この時点で、山崎五夫は亀山江ヶ室二十九番屋敷の佐本家と同居。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

4・? 廃県に付き、志賀直道は免職となる。(志賀家系図)〔祖父一〕

6・12 志賀直道が相馬誠胤の家令となる。(志賀家系図)

相馬家の顧問を委任されていた富田高慶の推挙による。直道は、木村精一郎・青田綱三と三人で相馬家の内務をとりしきることになる。彼等は、まず石巻に開田事業を起こし、石巻墨の江町に相馬屋という商店を経営し、田地の買入れ・米の売買を始める。店の景況は次第に伸び、明治九年からは木村精一郎を店主とし、しばしば増資を行い、宮城県北部一円に田地を買い広げた。古川と小牛田に支店を置き、多数の作子を使用して耕作させ、砂糖などの卸小売りも取り扱った。相馬家の資産は、明治五年に十万余円だったのが、十五年には十六万余円、二十五年には三十四万余円となった。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・「はじめに」)

直道の家令としての月給は二十五円。志賀家の家族は、正斉・幾夫妻、直道・留女夫妻、直温、正斉の娘・お金の六人。生計のため、素人下宿、素人酒屋などをすする。〔祖父〕十五)

直道は、相馬家の財政立て直しの他、相馬家の親族の大名華族の財政立て直しもした。織田長純子爵の家もその一つ。〔祖父〕十七) 直道は、家政に失敗し莫大な負債を背負っていた相馬家の親戚、松前家、室賀家、菅沼家、佐竹

家などの元大名や旗本の面倒まで見た。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・「はじめに」)

7・10

伯母・佐本きやう、川村健之助と結婚して、三重県伊勢国菴芸郡徳居村三十七番屋敷川村健之助妻に送籍。(川村渡

『伊勢龜山・志賀直哉の文学』)

7・16

義母・高橋(志賀)浩が生まれる。(志賀家系図)

冬 小野組の新事業として、古河市兵衛は以後二年間、鉾山経営に携わる。(五日会『古河市兵衛翁伝』)

*これ以降は太陽曆・・

明治七年(一八七四)

4・15

川村健之助・きやう夫妻の長女・すがが生まれる。(川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文学』)

夫妻の間には、他に次女・すみ(M9・12・6生)、三女・ふじ江(M12・3・13生)、四女・よう(M14・5・26生)、五女・てい(M16・10・20生)、長男・鉄治郎(M19・5・3生)、六女・ちよ(M21・7・16生)、次男・寛(M23・10・20生)、七女・まさを(M25・12・15生)、八女・たみ(M27・12・26生)、九女・クニ(M32・2・13生)、十女・チエ(M39・8・14生)が生まれる。すみとチエは後年、吉田せいの家にお側付女中として奉公した。(川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文学』)

6・11

年齢満二十一歳五ヶ月の志賀直温が慶応義塾に入る。(慶應義塾「入社帳」)

11・20

小野組が破綻し、古河市兵衛は主家を失う。小野組に財産の信託を任せていた相馬家も被害を被る。(五日会『古河市兵衛翁伝』)

この時点での相馬家の小野組への預金高として大蔵省へ届け出たのは、七万九千円余り。小野組を整理した際に現

金以外で受け取った旧公債証書五万千円余りを相場場で売却すると相馬家は四万二千円余りの損失となる。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M9・11・29書簡)

明治八年(一八七五)

1・? この時点で、佐本家の本籍は、三重県伊勢国鈴鹿郡龜山江ヶ室二十九番屋敷。(川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文学』)

3・4 相馬誠胤の異母弟・順胤が慶應義塾幼稚舎に入る。(慶應義塾「幼稚舎入社帳」)

5・17 木村精一郎の養嗣子・重堅が満十五歳十一ヶ月で慶應義塾に入る。(慶應義塾「入社帳」)

8・? 佐本家は龜山南崎五番屋敷の市川権平宅に移転し同居。(川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文学』)

8・? 古河市兵衛、もと小野組が所有していた草倉銅山の経営を試みようとし、渋沢栄一の第一銀行から一万円の融資の話を取り付ける。志賀直道にも援助を求め、相馬家によって二万二千円で草倉銅山・赤柴銅山の払い下げを受ける。

直道が相馬家の名義で大蔵省に払い下げ請願をし、代金は小野組に対する預け金より大蔵省において差し引く事を願い出、認可された。古河市兵衛は木村長七・中江種造を派遣して経営に当たらせる。(五日会『古河市兵衛翁伝』)

11? 佐本家、東京に転居したか? (川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文学』)

最初は、根岸の石川家の旧藩邸(中屋敷)内の武家長屋に住み、その後旧藩邸の向かいに転居したか? (桜井勝美『志賀直哉の原像』)

12? 志賀直道・木村精一郎・青田綱三、小野組倒産による相馬家の損失の責任を取るよう多々部ら旧藩士に迫られ、謹慎・進退伺いをするが、相馬充胤・誠胤に慰留される。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M8・12・4書簡)

4・？ 伯母・佐本せい、関屋三郎と結婚して、東京府第十六区小一区下谷金杉村士族関屋三郎妻に送籍。（川村渡『伊勢龜山・

志賀直哉の文字』）

5・16 木村精一郎は反対派の攻撃を受け、家扶退勤願いを出していたが、この日、家扶を免ぜられ石巻在勤を命じられる。

（相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M9・5・18書簡）

6・？ 志賀直温、慶応義塾を卒業。（阿川弘之『志賀直哉』）

8・？ 相馬家、上手岡鉄山の払い下げを申請。（相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M9・8・18書簡）

8・31 相馬順胤が慶應義塾に入る。（慶應義塾「入社帳」）

12・？ 相馬家、草倉銅山を古河市兵衛に譲る。（五日会『古河市兵衛翁伝』）

この頃？ 志賀直道、古河市兵衛に足尾銅山についての雑談をしたか？（五日会『古河市兵衛翁伝』）（祖父』15）

年末 足尾銅山を経営する副田欣一が資金に困り、古河市兵衛に経営肩代わりを打診。古河市兵衛は志賀直道の援助を受

けて共同経営しようと考え。直道は、一旦着手した草倉銅山の経営を家中の反対論のために古河市兵衛に譲渡したばかりであったので、断るが、古河市兵衛は屈せず、遂に共同経営の承諾を得る。（五日会『古河市兵衛翁伝』）

志賀直温の談話によれば《父直道は若年の頃、相馬藩より選ばれて、野州今市の二宮尊徳先生の開墾事務所に見学
に派遣された事があつたので、今市日光附近の地理に精しく、自然、足尾銅山の事も知つて居た。古河翁が来邸せ
られた或る日の事、四方山話の内に、足尾銅山などを経営して見てはどうかと物語つた事があつた。すると、数日
後に、古河翁が遣つて来られて、足尾の山が売りに出て居る、先日のお勧めの次第もあるから是非引請け度いと思
ふ故に助力を頼むといふ相談があつた。父にして見ると戯談から駒が出た形で、何も古河サンにお勧めしたといふ
訳では無いのであるから、受付け無かつたが、終に説き落されて、旧藩主からの出資を承諾するに到つた。》とい

う。(五日会『古河市兵衛翁伝』)

12・30 副田欣一が、志賀直道・古河市兵衛宛に、足尾銅山売買に向けての約定証書を渡す。(五日会『古河市兵衛翁伝』)

明治十年(一八七七)

2・18 足尾銅山の金額と支払い条件が決定。三万三千三百七十円を年賦償却・一万五千十円が即金支払。相馬家代表の志賀直道と古河市兵衛の間で共同経営の約定書も交わされる。直道を名義人とすること、その実は直道と古河市兵衛

兩人で譲り受けるので協力して坑業を営むべきこと、費用も損益も折半すること、直道は不慣れのため、古河市兵衛が一切の事務を取り扱うことなどが定められる。(五日会『古河市兵衛翁伝』)

2下旬 志賀直道、松前家の家政立て直しを依頼される。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M10・4・22書簡)

4・9 関屋三郎・せい夫妻の長男・宗音が生まれる。(川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文学』)

8頃 慶應義塾在学中の相馬誠胤に精神病の兆候あり。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M10・8・7書簡)

明治十一年(一八七八)

2・25 志賀直道、富田高慶に、相馬誠胤の病状について《御不快は一月以来一段と穏やかにいらせられ、一同恐悦限り無

き事に存じ奉り候。さりながら大貫家等御血縁等を以て考へ候へば、終に御全快遊ばされ候ものか甚だ心痛此の事に存じ奉り候。》と書き送る。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M11・2・25書簡)

3・26 志賀直道、富田高慶に、相馬誠胤の病状が芳しくなく、夫人を遠ざけている、この症状は遺伝的なものと報告。(相

馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M11・3・26書簡)

8下旬 志賀直温と佐本銀が結婚。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M11・9・5書簡)

結婚の際に、志賀家で古河市兵衛が踊りをおどって祝う。〔祖父〕(十一)

11・? 佐本銀、福島県下磐城国標葉郡新山村士族志賀直温妻に送籍。(川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文字』)

明治十二年(一八七九)

1・10 志賀直道、富田高慶に、石巻で買入れた田地が増え、木村精一郎一人では手が回りかねるので、しかるべき人を

派遣したいと相談。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M12・1・10書簡)

4・15 錦織剛清『闇の世の中』によれば、相馬誠胤の精神病が悪化し、邸内にて監禁する。

5・11 志賀直道、富田高慶に、監禁中の相馬誠胤の病状が悪いことを報告。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M

12・5・11書簡)

5・12 志賀直方が生まれる。志賀正斉の孫。(志賀家系図)

8・4 志賀直道、富田高慶に、『足尾銅山は都合も宜しく、本年前半季清算は未だ出来申さず候へども、老人前大略式千

五百位分配相成るべき古川の見込み』と報告。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M12・8・4書簡)

8? 織田家が志賀直道に借金返済に携わって貰う。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』上・M12・8・30書簡)

明治十三年(一八八〇)

1・? 渋沢栄一も足尾銅山経営に参加。志賀直道・古河市兵衛・渋沢が、権利義務・資金とも三分の一ずつの負担となる。

渋沢によれば、二万円ずつの出資だった。(五日会『古河市兵衛翁伝』)

3・4 東京で兄・志賀直行が生まれる。(志賀家系図)〔『白い線』〕

この年 志賀直温、第一国立銀行に就職。(志賀家系図)

最初、釜山浦支店で簿記貸付金等の業務を担当。その後、元山津出張所、東京本店、石巻支店に勤務。(阿川弘之『志賀直哉』)

明治十四年(一八八一)

3・9 志賀直方の母・志賀真(菊)死去。(新『志賀直哉全集』⑩日記人名注)

4・20 志賀直方の父・志賀直隆死去。両親を亡くし、直方は志賀直道の養子となる。(新『志賀直哉全集』⑩日記人名注)

8・18 古河市兵衛から足尾銅山の資金不足についての相談があり、志賀直道が千五百円を持参。(『祖父』十一〇)

足尾銅山は、明治十四年末までは赤字だったが、明治十四年末十五年初めから鷹の巢の鉱脈に当たり収支が償うようになり、十七年五月頃に大鉱脈に当たって非常な産出があった。(五日会『翁の直話』)

11・4 関屋三郎・せい夫妻の長女・せきが生まれる。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

明治十五年(一八八二)

2・11 志賀直道、富田高慶に、足尾銅山は、引き受けた時は平均月七千斤くらいの出銅だったが、今は四万斤ほどになり、

どれほど盛大になるか底の分からぬ山だと報告。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M15・2・11書簡)

この年 志賀直温、第一銀行石巻支店に転勤。(志賀家系図)

11・7 志賀直行が疫痢のような病気で夭折(二歳八ヶ月)。守が他家で何か食べさせたのが原因。広濟寺に葬られた。(志賀

家系図) (『稲村雑談』) (『白い線』)